

## ■ FRB 自体の不確定さによって市場は混とん…

前回更新分の本欄でも触れたように、なおも足下のドル/円は一目均衡表の日足「雲」下限と89日移動平均線（89日線）に下値を支えられる格好で推移している。振り返れば、これは4月下旬に89日線、日足「雲」上限の順にそれぞれの節目を上抜けた時以来のことで、それだけ節目としての存在感は大きい。

実際、昨日（19日）も米連邦公開市場委員会（FOMC）後のパウエルFRB議長会見の内容を受けてNYダウ平均が一時513ドル安（前日終値比）まで下げ幅を拡大したことで、一旦はドル/円も日足「雲」下限を下抜けて一時112.09円まで下押す場面があったものの、同日終値は日足「雲」下限の上方までしっかりと値を戻す動きを見せた。

既知のとおり、今回のFOMCでは事前の市場予想通りに25bpの利上げ実施が決定し、参加メンバーによる2019年の利上げ見通しは前回の年3回から年2回に減らされた。ここまでは筆者にとっても想定通りで、そうなった場合は例によって「大山鳴動して鼠一匹」ということになるのではないかと見ていた。実際、パウエル議長の会見内容が伝わってくるまでは大よそ思っていたとおりの展開であった。

ところが…パウエル議長が“市場との対話”を重視しようとするあまり、一貫性を欠いた発言に終始し、それを市場は「FRB自体が不確定で揺らいでいる」と捉えた模様で、漠とした不安感が株売りを誘い、結果として市場にリスクオフのムードを漂わせることとなった。

個人的にパウエル氏を擁護するつもりなどさらさらないのであるが、ここは無理からぬところでもある。金融政策運営の現場に平気で土足で踏み込んでくる異形の米大統領による無定見、不見識な発言に止む無く耳を貸しながらも、市場に対しては出来る限り誠実に向き合いたいと考えた場合、誰が同じ立場に立ってもパウエル氏以上の対応を行うことは難しかったであろう。

その意味からしても、いよいよ国際金融市場を取り巻く状況は本格的に混とんとしてきた。そもそものはじまりは米中通商摩擦の問題であるが、それはすなわち安全保障の問題に関わることでもあるから、残念ながら避けては通れず致し方ない。

ともかくにも、当面はドル/円が89日線や日足「雲」下限の節目をクリアに下抜けやしないかという点に要注目。仮に下抜けても、次に週足の基準線（現在は111.96円に位置）や月足チャート上の62週移動平均線（62週線/現在は111.59円）などが下値をガッチリと支える可能性が高いと見られ、そうした点も再確認しておきたい。

一方、昨日はイタリア側が再提出した2019年の修正予算案を欧州委員会が承認し、とりあえず現段階での制裁手続き入りが回避される格好となったことでイタリア債が買い戻され、一時的にもユーロが買われた。

とはいえ、FOMCの結果と参加メンバーによる金利（利上げ）見通し、FRB議長発言などが伝わるごとにユーロ売り圧力は強まって行き、結局「FRBは市場が想定していたよりも姿勢がタカ派的」との認識が広まると、一気に対ドルで値を消す展開となった。確かに、イタリアの問題

は一件落着と言えなくもないが、ユーロ圏は他にも多くの問題を抱えていて、さすがにユーロ/ドルの上値を積極的に買い上がるといふムードにはなりにくい。

左図でも確認できるように、ユーロ/ドルの月足ロウソクは2017年8月以降ずっと月足「雲」の上限および下限を意識しており、今年5月以降は月足「雲」下限をトレースするような格好となっている点に注目しておきたい。この月足「雲」下限は来年4月には1.1000ドルを下回るところまで水準を切り下げる。

（12月20日 11:45）

